〔研究ノート〕

雪村の奇思（1）—『本朝画史』の雪村観（その１）—

雪村の画は、ひとを寄せつけないような画ではありません。美術にさほど関心をもっていないひとでも、ひとたびその画の前に立つたとき、自然と画の中に入っていける、そのような画だと思います。

たとえ「呂洞賓」という中国の仙人の名前を知っていなくても、描かれた主人公が何か不可思議な力をもった、えたいの知れない人物であること位い、誰もが感じます。人物画にかぎらず山水画や花鳥画に見る誇張した、機智にあふれた表現は、劇画に馴れたわたしたちの眼には清新に映ります。親近感をいだきます。

私がはじめて雪村画を見たとき、その画の明快さ、ただよう人間臭さにこころひかれました。以来、この画家について研究してきましたが、この『美のたより』の「研究ノート」欄を借りて、日頃、雪村について思いついたことを皆様に紹介いたします。

雪村は戦国時代の禅僧画家ですが、さまざまな題材に筆を染め、いろいろな技法を試み、多彩な作品をのこしています。その遺作は、中には後世の偽作も含まれている可能性もありますが、二百点を越え、四百年も昔の画家としては信じられないくらいの異例の多さです。しかも、同じ図柄のものがないのには驚かされますが、しかし、それぞれに共通する特徴も認められます。その特徴のひとつに、これから述べる雪村の「奇思」があります。

奇思という言葉は、奇想と同じで、ここではいちおう、今までの因襲の殻を打ち破る、自由で斬新な発想、あるいは構想と理解することにします。後で、それについて具体的に検討しますが、雪村の画をかたちづくる核になっているのが、この奇思ではないかと考えています。それは彼の芸術に対する基本的な姿勢であり、とりもなおさず彼の世間に対する身構えであり、晩年、奥州の三春へ遍歴し、その地で没しますが、この画家の生き方にも関係しているようにも思われます。

多い遺品に対して、雪村を語る同時代の文献資料がほとんど伝わっていないのは、不思議といえば不思議です。ですから、雪村の伝記は、江戸時代に書かれた画史や地誌などの二次的な資料の記述にたよるしかありません。それらのうちで、狩野永納（1634—1700）が編述したわが国の代表的画人伝である『本朝画史』（元禄4年〈1691〉の本朝画伝の名称を改めて、元禄６年に上梓したもの）は、雪村についての基本資料です。次にその箇所を書いておきます（原文は漢文）。

僧雪村。諱（いみな）周継。鶴船翁老と号す。佐竹一族にて、常州部垂（へたれ）の村田郷の人なり。其父、雪村を廃し、其の庶を立んと欲す。之に因って、髪を薙って僧となる。性（うまれつき）、画を好む。雪舟の筆法を慕って、ついに師弟の義を約す。学ぶところ天真を失わず、潑墨は雅淡、務めて華藻を去り、大低略して、新意を出す。用いるところの筆は狂逸にて、奇思あり。山水に長じ、人物、花鳥これに次ぐ。雪舟の従弟居多なり。継、其の左に在り、声聞独り高し。或は謂う、雪舟、西辺に在り、雪村、東極に居りと。いまだ曾って面せず、ただ画跡を見て師弟となす。故に、相似ず。ただし、倭画を作らず。

『本朝画史（伝）』の編集は、永納によって初めてなされたのではなく、実は彼の父狩野山雪（1590—1651）によって企てられ、それを永納が継承して完成させたものです。画史の跋文によると、山雪はわが国の古今の能画者百余人を選び、その伝記の草稿を書き終えていたが、その完成を前にして病没したため、永納は遺志をつぎ、本書を編述したとあります。

雪、笹図　雪村筆

山雪は狩野山楽の後継者として、江戸初期における京都画壇の代表者であり、また、中国の画史、画論に精通した教養人でもありました。彼は晩年になると、奇抜な構図による奇趣のあふれた作品を描き、天祥院旧蔵の「老梅図」（メトロポリタン美術館蔵）と「雪汀水禽図屏風」はことに有名です。

前の雪村の記事は、執筆者のこの画家に対する共感や尊敬の念が感じられますので、山雪その人が書いたものではないかと推察されます。その可能性は強いといえます。そう考えますと、山雪は雪村画を見たに違いなく、そこには山雪ならではの鋭い、意味深長な指摘があります。

『本朝画史』は、雪村が常陸国の北部を支配していた戦国大名、源氏の後裔にあたる佐竹氏一族の長子であったと記述しています。出自を佐竹氏とする考えは、谷文晁（1763—1840）も支持しています。しかし、その典拠は現在、確認されていません。近年、亀田孜氏が系図を手掛りに、雪村が佐竹義紀（天鳳存虎）の子供ではないかという説を提示されましたが、憶測の域を出ておりません。

寒山図　雪村筆

また、常陸太田市の正宗寺は夢窓疎石を開山とし、月山周枢（佐竹義継）を第二世とする佐竹氏累代の菩提寺ですが、この寺には雪村の最も早い頃の「楊柳観音図」が伝存しております。そして、正宗寺末寺の弘願寺（瓜蓮町）から、最近、正宗寺本の手本となったと考えられる張思恭様の「楊柳観音図」（室町）が発見され、この二点の観音図はもともといっしょに正宗寺にあったものらしい。佐竹氏と雪村を結びつける有力な資料が出現したわけです。

雪村の父が家督を庶子に譲ったという逸話は真実かどうかは別にして、山雪がこれを雪村伝に採用したことは興味をひきます。山雪自身、幼い時に父の反対をおしきって画家を志した過去があり、そのことが雪村の逸伝をとりあげさせたのかもしれません。山雪は自身に照らして、雪村を時流に逆う、傲慢な性格の持ち主と見ていたふしがあります。雪村の奇思はすでに幼い頃に芽生えていたと想像されます。

（林進）

季刊 美のたより №64
昭和58年 9月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.